



『江戸名所図絵』の「大森和中散」

### 《本号の表紙絵》

#### 大森「和中散」本舗

文久3年(1863), 二代広重作の浮世絵(錦絵)である。二代広重(1826~1869)は初代広重(安藤広重1797~1858)の門人で、初代没後、二代目を襲名した。

東海道沿いで、江戸大森の名所として「鈴ヶ森刑場」と「和中散本舗」がある。「大森和中散」については、齊藤月琴(1804~1878)が天保7年(1836)に著した『江戸名所図絵』巻之二に長谷川雪旦の絵が載っている。

『江戸名所図絵』と広重の浮世絵を比較すると、軒下に丸い突き出し看板があるかないかなど若干の相違があるが、建物や生葉をひく羽根車、上り座敷の「和中散」と書かれた衝立看板などほぼ同じである。

大森に「和中散本舗」がいつできたか不明だが、18世紀末から19世紀初頭にかけて実地調査した『五街道其外分間見取延絵図』を見ると、大森村(今の東京都大田区大森本町)に2ヶ所「和中散」と書かれている。1ヶ所は現在の「平和島入口」付近で、もう一ヶ所は「梅屋敷」近くである。また、北蒲田村(今の東京都大田区蒲田)に1ヶ所、今の「梅屋敷公園」近くにある。北蒲田村の「和中散」には、建物の西側に生け垣で囲まれた広い空き地がある。もしかしたら薬草栽培の畑かも知れない。

オランダ商館付医師ケンペル(Engelbert Kaempfer 1651~1716)は『江戸参府紀行』で「和中散」薬店の見聞を載せているが、こちらは、今の滋賀県草津近くにある梅木村の「和中散」である。大森の「和中散」については一言も触れていない。「和中散」は胃腸薬であるが、江戸時代末期には「和中散」を作る薬店は国内に数ヶ所あり、それぞれ「和中散」の成分は若干異なっていたという。

(蔵方 宏昌)